

世界紀行文学全集

14

南アジア

志賀直哉 ● 佐藤春夫 ● 川端康成 ● 小林秀雄 ● 井上靖

ほるふ出版

世界紀行文学全集 第十四卷

南アジア

監修

志賀直哉・佐藤春夫・川端康成・小林秀雄・井上靖

発行日

昭和五四年九月一日 発行

発行所

株式会社ほるぷ出版

東京都新宿区新宿二一九一三 電話(〇三)三五四七〇三一(代)

代表 中森時人

総発売元

株式会社ほるぷ

東京都新宿区新宿二一九一三 電話(〇三)三五六六二二一(代)

製作

東京連合印刷株式会社

目

次

木下 奎太郎	マニラ記……………	三
石坂 洋次郎	比島土産話……………	八
今 日出海	旧教と混血児……………	一三
三 木 清	比島人の東洋的性格……………	二〇
萩 須 高德	マニラ……………	三五
マレーシア		
大 橋 乙羽	新嘉坡……………	三六
島 村 抱 月	新嘉坡より……………	四〇
永 井 荷 風	新嘉坡の数時間……………	四一
寺 田 寅 彦	ベナン……………	四三
三 宅 克 己	新嘉坡と彼南……………	四四
德 富 蘆 花	新嘉坡……………	四六
森 三 千 代	「国違い」の人々……………	四九
藤 森 成 吉	シンガポールの花火祭……………	五五
久 松 潜 一	月光のものと彼南……………	六三
野 上 豊 一 郎	海南諸港……………	六四
井 伏 鱒 二	昭南日記……………	七〇
鈴木 二 郎	マラヤの生活……………	七七

インドネシア

朝倉文夫

牧野英一

森三千代

高見順

三雲祥之助

阿部知二

佐藤春夫

ベトナム

村松嘉津

淡徳三郎

カンボジア

石川達三

村松嘉津

小田嶽夫

タイ

木下圭太郎

小田嶽夫

吉川英治

辻久一

ブルナイに入る……………九三

火の山のほとり……………九四

スラバヤの夜市……………九六

蘭印点描……………一〇二

ジャワの西部・中部……………一〇九

ジョクジャカルタ……………一一五

バリ島の旅……………一二九

安南の文廟……………一三二

北ヴェトナムに旅して……………一三四

西貢……………一三八

カンボヂヤ紀行……………一三九

サイゴン・プノンペン……………一四七

暹羅記……………一五〇

バンコックの印象……………一六一

水都アユチャ游記……………一六七

バンコック南四三二キロ……………一七一

牧野英一	塔の町米の町	一六
清水幾太郎	東洋の涯	一七
高見順	ビルマの文化	一八
インド	ビルマの女性	一八
伊東忠太	印度旅行茶話	一六
鹿子木員信	仏蹟巡礼行	一九
石川達三	釈迦とガンヂーの国	二四
天沼俊一	モカメー・ガートからラクサウル	二五
	ラクサウルのバンガロー	二八
	ラクサウルの農家	二九
松方三郎	印度より歸りて	三〇
阿部展也	インド西南部石窟	三七
	インドの祭り	三三
木下順二	カシミールの旅	三三
	インド農村の軒下に寝て	三三
火野葦平	花と牛と乞食の街	三九
今西錦司	カラコラムへ	四三
	フンザとナガール	四九
	ヒスパー・パス	五五
	バルトロ	六九
竹山道雄	スコロ・ラ越え	八二
谷川徹三	ベナレスのほとり	三三
	美しい眼の人	三〇
	印度の仏跡をたづねて	三六

田中峰子	空からみたインド……………	三二四
今泉篤男	アジャンタの洞窟寺……………	三七七
福沢一郎	ヒンズウの幻想……………	三三〇
ネパール		
天沼俊一	首都の六日間……………	三三三
川喜田二郎	ネパールⅡヒマラヤの旅……………	三三八
パキスタン		
大宅壮一	『千夜一夜の世界』の玄関・パキスタン……………	三五〇
スリランカ		
三宅克己	コロombo港の碇泊……………	三五五
	コロombo、スエス間の十二昼夜……………	三五八
	コロombo……………	三六〇
与謝野晶子	コロombo……………	三六三
小堀杏奴	カンディに詣つ……………	三六六
久松潜一	コロomboとアデン……………	三六八
荻須高德	セイロン……………	三七二
細川護貞		

地

図

フィリピン、マライ、インドネシア、ベトナム、カンボジャ、タイ、ビルマ、インド、ネパール、パキスタン、スリランカ……… 卷末（折込）

地図作製 玉木 進一

南
ア
ジ
ア

マニラ記

木下 本太郎

船中

の模様ぐらいいにはなるかも知れない。寺の石段の下の方では小屋がけをして芝居が興行せられ、物を売る店、行商人、見物の群集が不潔な、然し泥の中の雑草のような根強い生活を開展している。極楽寺の方は山腹に石垣を作り、高塔を建て、泉池を設け、其規模は大きい、新しく建設せられたか、或は新しく修繕せられた堂宇の装飾がなまなましく、ぐろぐろしく、蛇寺の蛇と共通する感じである。

芸術の事になると支那はどうしても懐古的の国である。そこへ逃げて行つて静かに呼吸をしないと、息がふさがつてしまうのである。あれだけ過去を持つていながら、何が現代をかくまひで墮落せしめたか。上海、南京に新に生れつつある文学の事は知らぬが、現代の支那の到る処に看るものは不潔とグロテスクとだ。そしてそのはじめとした中に民衆の生活の根強さが見られる。一人々々は結核や寄生虫病や瘡や肉腫で虐げられてゐるだろうが、数でこなしている。極楽寺の壁には東郷大将、乃木大将の署名の小さい額面がかかつてゐた。

シヤムから陸路シンガポールに戻り着いたのは昭和五年十二月二十六日の夜七時で、日本人経営の碩田館という宿舎に投じた。碩田はおおいた(大分)のしゃれで、昔の漢学者が作つた名である。宿の主が大分の者だからである。出かせぎ人のような気分になるが、西洋人のやつてゐる宿屋は恐ろしく高くて馬鹿々々しい。三十日の午後一時にハンブルグ・アメリカ線のドイツ汽船 *Guatland* に乗りこんだ。これでマニラに行くのである。僕より遅くシンガポールに着いた伝染病研究所の動物学者の山田信一郎君が船まで送つて来てくれた。

クララ・ランブルは午前六時に下車して一時間ばかりを見物に費したに過ぎない。ここには医学士の方内多登市氏が久しく医業を営んでおり、同氏を頼りて市街や植物苑を見た。英人の経営する伝染病研究所があり、その役員にはベンコックで知りあいになつたのも居るが、生憎きようは日曜日で往訪することが出来なかつた。道路は広く舗装好く、其植物苑は華潔である。日本人のやつてゐる洋食屋で朝餉を喫し

た。

シンガポールに滞在中はよくその植物苑に往つた。その木その竹は我邦と類を異にし、自然の意匠の豊富なことを驚嘆せしめる。殊に熱帯地方は竹の種類が多く、ここにも印度、ビルマ、シヤムなどのかんりの多くの種類を聚めてゐる。中に就き——是れは尤も棕櫚科であらうが、*Cratogeomys latka* という羽毛状の葉を持つたものは、その少壮の茎が鮮かな朱の色を呈して真に美しい。まだ青い果を着けてゐるマングスチンの樹を見ることが出来た。「森裡」の紅花が地の上に落ち敷き、驟雨が忽ち至つて池の睡蓮をかくした。多くの小猿が叫声を挙げて梢から梢へ急ぎ移つて行く。

さてこのドイツ汽船は荷物の運搬が本位で、客室は二十五ばかりしかなかった。食堂は甲板の後方に在り、その両側の室は一は喫煙室で、一は婦人室である。夕方三人の客が乗り込んで来た。一人はマニラの衛生局の役人 *Dr. Hart* であつた。同君を送つて来た人々が去つたのち、その人とも一人のわかい人が喫煙室に残つた。それは後で懇意になつた *Dr. Tampe* である。アフリカの北海岸に同じ名の首都を持った *Surenna* という蘭領の小国がある。ここでは大砲の試射は出来ない。少し力強く打ち出すと隣国領へ玉が飛んでゆく。その国の衛生局長のような男で、東洋の癩療養所の視察に派遣せられ、日本にも往く筈であつたところ、マニラに癩会議が有るので予定を変じてそこに航するこ

とにしたのだというのである。強度の近眼鏡をかけた小男である。

ランベ君は不思議な話をした。そのスレナムという国では類は子供の病気だというのである。即ちこの病気は比較的近くこの国にはいつて来た。それにかかる者は子供ばかりであった。類は世人が想像するようにそう移りやすい病気ではなく、患者と長く接触を保つ小児が主として之に侵されるのである。スレナム国では偶然の機会でこの実験が自然的に行われたのである。

十二月三十一日早朝船がシंगाポールを発したらしい。船中の気温はさして高からず、常に微風が有って爽涼である。夜は食堂で除夜の晩餐が出た。その羹には少し塩がきき過ぎる。日本の船の如くいろいろの品目を用意しないが、一皿の量は甚だ多い。ザウアクラウトなどと云う酸い野菜が盛られ、すずろに伯林生活を回想した。

夜中にファイヤ、ファイヤという喚声がわらわらと起った。若しや火事ではないかとピジャマのままで起き上って甲板に出た。夜は静かで海は遠い。多分ノイヤアルとでも云って既に人が相祝したのであろう、再び牀中にまどろんだ。

明くれば昭和六年の一月一日、木曜日である。ひとり船首に立って日輪を拝した。朝から時々微雨があつて、空は多くは曇つた。船客が少いから避暑地の小さなホテルのようである。ランベ君は日本行は断念して、マニラの会議

が済んだら葡萄酒のマデイラに行く由。マデイラとは僕の壮くして覚えた同じ名のリコエルの産地である。

イギリスの一老人が居た。恐らく八十歳に近い人であらう。一年一度ヨーロッパと東洋との間を航海するのだという。然しまだ日本には行つたことがない。ハアト君に拠るとその純粹のイギリスの会話は徹頭徹尾解し難いものであると。

夜は月が良く、波頭が銀色に光った。

一月二日。午前八時頃 Muir の沖に止まる。遠くに椰子の並木と天界線を持った低い地帯が長く引く。小汽船が来て船員がそれに乗り込む。海の中から鉄製の蛇腹管を引き上げ、それを船の油槽に繋ぎ重油をかいこむのである。此船は重油の発動機船で、煙突から黒い煙の立ち上るようなことがない。

其間に浮袋を背に巻いたり、ボートを卸したりする遊戲のような練習をする。午後午睡の間に船は動き出してしまつた。

一月三日。食事の献立も割合に質素で、朝される果物は殆ど林檎とバナナばかりである。朝の麵麴だけはいろいろの種類があつて、朝起きるのが楽みである。夜は鵜鳥の次が出た。

一月四日。午前中はやや強い雨で波も高く、船が動揺した。僕の卓は例の英国老人で、僕にはその言う事が少しも分らぬ。もうひとりとはわ

かいアメリカ商人で、この老人と非常に仲好しになつたらしい。船長の卓は老いた上品のイギリス人とその美しい夫人。老人の姉妹らしい女。またわかい夫婦者はその国籍鑑定がつかない。隣の卓がハアト君とランベ君と事務長とも一人。隅の卓は日本行のドイツ人夫婦、老ドイツ婦人、イギリス人夫婦、六七歳の小むすめ。うしろの卓はわかい夫婦、それだけが食堂の仲間である。船員たちはお互の間の会話にも英語を使う。少し気の毒に思つた。

この航海の間に僕は Reginald May と云う、もとシヤムでイギリスの領事をして居り、且シヤムの商務省の顧問であつた人の An Asian Arcady, The Land and People of Northern Siam (Cambridge, W. Heffer & Sons Ltd. 1926) 一冊を読み上げた。バンコックの会議では初めは英仏語俱に行われたが後には結局英語が支配した。ハンブルヒ熱帯病研究所の老 Noth 氏が英語で座長をした。発音は寛東なく見えても機会を誤らぬだけの司会をした。マニラの会議はバンコック以上なことが予想せられたので急に英語を仕込んで置くのである。その効果のほどは疑わしいが、この本は実に面白い本であつた。イギリスには昔からこういつた旅行記がある。僕の小さい時分、兄たちは好んでスタンレーのアフリカ探險記を読んだ。僕は満州に在つた日 Aurel Stein の Desert of Ancient Cathay と云う本を耽読し、自分も中央アジアを旅行して見たいという気を起したものだ。殊に史記で夢のように考えていた酒泉国などが今

も實際有つて、年来メッカ行を企て、老いて遂にその旅に上つたというような酋長の可憐の逸話も伝えられてあつた。まるで「時代錯誤」としか考えられない風景と生活とだ。この北方遼羅風土記も汽車の出来ぬ前の旅だから、實際チエンマイを見て来たわれわれにも夢物語の如くであつた。この本は P. A. Thompson の *Lo-yus Land* という本（この方は主として南方暹羅を叙したものである）の対にしようと思つたものだ。トムソンの本はシャムでもシンガポールでも手に入れることが出来なかつた。十余年前の出版である。

ハート君の御世辭に拠ると、船に乗つた時と船から下つた時とで僕の英語力は格段の相違であると言ふ。その代り他の國語をしゃべろうとすると、忽ち頭に英語が閃いたり、また音が英語のようになつたりする。英語の発音というものは余程特別のものである。シャル・ヴィルドラツクの「郵船テナンテエ」という好戯曲に、イギリスの水夫が出て来て簡単なフランス語を使うところがある。それを聴くと見物がたまらなくなつて笑い出す。英語は一人一人別のアクセントを持つ。Year という語を或人はイヤヤと発音する。他の人はイヤアルと発音する。それでもお互に理解する。然し場合によるとお互志で聞き直すような事もあつた。この点支那語に似たところがある。英語にはリエゾンという事が無いというが、實際はその単位となるのは一つのシラブルではなく、飴ん棒のようになつた音楽的の一流れた。ちょうど昔の東京

弁で「何ヲ・云ツテ・居ヤガル・ノ・ダイ」というのを「ナニツチャンダイ」といつても「テヤガンデエ」と云つても「テヤガルンデエ」といつても好いようなものであるらしい。子音が主で母音が副で「マニラ」でも「マヌラ」でも、「マネラ」でも、「マノラ」でも好く、M と N と L とがよく響き、アクセントに間違いがなければ通るのである。昔日本にフェリシアン・ルガメエというフランスの画工が来たことがある。木板師がそんな名をのろゝろいつたて通じないから、「コンチキシヨ・ペランメエさん、お早う」と云つたと云う話が伝わっている。

然し他國人がこの訛のまねをするときよく通じない。Dr. Muir という人はスコットランド生れで、カルカッタの熱帯病学校の有名な癩学者だが、僕が「ドクタ・ミューア」と呼んだつてこつちを向かない。フィリッピンのドクタ（フィリッピン人の英語の発音は一種特別である）が「ドクトル・ミユイル」と呼ぶときよく通じる。

一月五日、月曜日、朝五時半に起され、六時半に食事、七時過ぎに船を下つた。レオナルド・ウッド・癩撲滅基金の幹事 Mr. Burgess が埠頭に出迎えた。僕はランベ君と俱にハート君の自動車に乗せて貰ひ、マニラ・ホテルに入った。五階建の、アメリカ風の好ホテルである。

マニラ

マニラ・ホテルには帝國ホテルのようなややしさがなく、その設計が平明快活である。少

しも封建的なところ、旧弊なところがない。前面には広い、扉の無い入口があつて、直ぐそこがホールである。その籐椅子に腰をかけて前の庭を眺めると、烈々たる光が樹葉、街路に直射して、凡ての白いものは青味を帯びている。景觀の主体を成すものは椰子属の喬木で、それには数種がある。其間に鮮紅の花を着けた蔓が目立っている。熟く見るとそれは花ではなく、枝の尖端の、花にまぎらう葉の色である。是は *Euphorbia pulcherrima* と云う種類で、原産地はメキシコだが、*Bougainvillea glabra*（原産地はブラジル）などと共に、今では熱帯のどここの地方にも移植せられて、重要な鑑賞植物となつてゐる。

このホテルの居室には妻戸を持ったヨロッパ風の小窓を付けず、引戸をはめた大きな窓を設けること、我國の古来の建築の如くである。此事熱帯地方には甚だよく適する。二枚の引戸はおのおのその幅六尺ばかりで、太い格子のうちに嵌めこまれているのは硝子ではなく、此國で昔から硝子の代用品として用いられる一種の貝殻であり、甚だ雅味がある。尤も光線の通過はそう十分では無い。窓をあけると微風が常に到つて苦熱が無い。小房のうちのには浴槽のほかにツツシムがしつらえてある。

Leonard Wood 基金の費用に由る國際癩委員會は一月の九日から、少し隙がある。その間にすべきことは、ヨロッパ活字で印刷せられ、千六百二十二年及び二十三年に此の地の Binundoc の S. Gabriel の Hospital で出

版せられた、日本語のロザリオの經二冊を捜すことである。Retana の「比律賓出版書目」にこの書がマニラのサン・フランシスコの修道院の書庫に在ると記されてあった。著者はサン・ドミンゴ門派の Padre Fr. Juan de los Angeles である。

まず三井物産に行き、石田幹之助君の友人たる築田周雄氏に会い、それから支店長の阿部吟次郎氏に紹介せられ、それから若し尋ねる本が見付かった場合には写真師をして之を複写せしめ、その費用をば立替えて貰うことなどを依頼した。

マニラ・ホテルは海岸通に在り、埠頭に並ぶ。それから三井物産支店の在る繁華街まで出るのには先づ Calle Isaac Peral を通り、左に曲り、Taft Avenue の大通に出て、それから Wallace Field と云う小公園、後に説明するイントラムロスの石垣を左に見ながら進むと、Plaza Latorn に突きあたる。そのうしろに新築のギリシャ風の郵便局の大廈が立つ。そこで少し左の方に曲ると直ぐ Jones Bridge に出る。是はこの都市を東から西へと貫流する Pasig River に架したのである。これまでが近世的アメリカ的の市区で、橋を渡ると東洋風ヨロッパ風の交錯した繁劇の街区になるのである。そう長くない橋を渡ってしまつて、其袂から左に曲つて河に沿うた狭い道路に面して三井物産支店や領事館が在る。その街区の名は San Blas と云うのであるが、固有名詞の響は殊に濃厚の異国情調を醸するのである。また橋を渡つ

てなお真直に進むとこの市の銀座通になるのである。其地域は纏に言つた Binondo である。

兎に角始めて大都會に着くと、物は買わなくても打ち並ぶ商店の飾窓をのぞくが楽みなものである。又それで其都會の柄というものが理解せられる。ここでの目貫の場処は橋を渡つて Plaza Moraga と云う小さい広場から右に入つた Escorial である。金工商、時計舗、洋服屋、小間物店、呉服屋、活動写真、ソオダ・フォンテン、パナ帽を売る家等が軒を並べている。その品物はアメリカ的のスペインヤ的で、ふとハバナの繁華街を歩いているような氣持になることがある。即ち置時計の彫刻の人物花鳥の古風な趣味、アラビヤ美術を加味した皿のモザイク模様……そんなスペインヤ的分子からの幻想である。然しハバナに比べると中世氣分がずっと少い。指環の縁、銀器の裝飾には少し田舎びた所が有る。やはり男の物を見ると買いたい氣を起す。夏の帽子を一つ買う。

こう云う通をやはりアメリカ人が肩で風を切つて歩いている。のどの奥から出る声、変に舌を丸める声が突然後から起つて行人を驚かせる。スペインヤ人と土人との合の子は、そう白過ぎざる肌、深過ぎざる眼の球、黒き瞳、黒褐の髪の色で、我々の眼には甚だ美しく見える。そういうのには雀卵斑が多い。白い人種とやや褐色の人種との合の子、即ちスコットランド人の女には之を持つものが多いとの説である。スペインヤ人と土人との合の子にもこの説が当るのであるか。

イントラムロス

さてイントラムロスである。是れ「城内」の義である。近代的アメリカ的の舗道 Calle P. Surges から左側にあつて其の外壁が看られる。即ち高さ二十尺、幅約十六尺の石垣が古市街を取囲んでいるのであるが、その外側にはまた幅二百メートルばかりの美しい芝生の濠が回る。今はゴルフリンクに用いられているが昔は水を湛えたのだそうだ。そうすると其原則も其景観も全く日本の古い城の構造と同じである。實際さきの舗道からこの古市街の南門たる Puerta real を望むと、白垣の古びた具合、その上から松ではないが鬱蒼たる古木が其枝を垂らしている様子、江戸城外壁の或部分と甚だよく似ている。是は決して偶然の暗合では無さそうである。この城が日本の城をまねたか。日本の城がスペインヤ風の城の造りをまねたか。

Miguel de Legazpi が、マニラの当時の住民たる回教のモロ族を破つてここに始めてスペインヤの植民地を開いたのは千五百七十一年で、その時はこの城の外廓は木材に過ぎなかつたと云う。二百の家屋と一寺院とが建てられた。レガスピは翌年死んだが、此植民地は千五百七十四年に始めて敵襲を受けている。それは七十艘の船に乗つた二千人の支那の海賊で、日本の大將一人も之に雜つていたそうである。彼等は一度そこを陥れたが、後またそこから追われた。千五百九十年には新しい總督がスペインヤから到着しマニラの市街も本式に建築せられるように

なつた。千六百三年、千六百四十四年には重修拈張せられた。千六百九十二年には英人の陥る所となつた。千七百九年には新しい城砦が築かれた。千八百五十二年以来その門は夜から朝の四時まで閉された。今から七十年前まではこの城は屢々モロ族の侵す所となつた。

大体どう云うのが此城の沿革だが、さて今看るような城壁、濠池は何れの時の型であるか明にすることが出来なかつた。千五百九十年とすると、天正十八年に当る。大坂築城と前後する頃である。

イントラロスの市街の景観に就いて述べたいのだが、これまでは実は前に書いたもので、このあとには唯疎らな手帳と曖昧な記憶とにたよるより他に道が無い。地図、日記、手許にない。唯印象を想起して見ると、大体絵画的という言葉が一般に当るのである。城壁の内側は牛込土手三番町の如く、それから狭い道に入ると、西側に二階或は三階だての暗い家が並ぶ。その上階にはスパニヤ風の出張窓が付いている牛乳を売る店、果物を売る店、雑貨商、しもうた屋など並んでいるが、その生活は、貧弱な支那の町の如くである。寺院の沢山有る街区に到つて始めて品位が出てくる。サント・オオグスチノの寺、レコルトの寺、カテドラル・ヘスイトの本山、サン・ドミンゴ、サン・セバスチアノの寺などである。

さて、僕の捜そうと思つた本はサン・フランシスコのお寺にはどうしてもなかつた。却つてサン・ドミンゴの修道院の書庫で見出すことが

出来たのである。

その図書館の長はフライ・アルベルト・サンタ・マリヤというまだわかい学僧であつたが、その本の存在を知つて居り、それを捜し出して来てくれた。二冊ともに、支那の紙などに印刷した相當に部厚の本であるが、保存が悪く、表紙を欠き、またぼろぼろになつてゐるページもあつた。これらの本やその著者の事などに就いては嘗て記述したことがあるから、ここにはそれを繰返さない。

寺院通い、図書館通いの間に多少の見聞を広くすることが出来た。修道院などには必ず幾冊かの写本の教会史がある。その内容は知るべくもないが、フィリップスの歴史に取つては重要な材料であること疑無い。所がフィリップスの歴史と云うのは謂わば耶蘇会の宣教師の記録から始まるものである。その前はむしろ歴史以前の時期である。宣教師の手に成るフィリップスの文書ではまた日本との交渉の顛末は重要な項目となつてゐるらしい。して見るとフィリップスの幾分は日本歴史の拾遺に當るわけである。誰かスパニヤの語に通じ、古文書を読む稽古をしたならば、マニラ現存の文書から日本歴史の未だ知られざる事柄を捜すことが出来はしまいかと想像せられるのである。

僕がマニラに滞在した間、そして日々頼委員会が開かれてゐる間に、マニラの英字新聞にフィリップスの顛は初め日本から伝わつたのであると云う記事が二日に亘つて連載せられた。

人に聞くに此説は今に始まつたことではない。その起源を尋ぬるに千九百十四年、時のマニラ衛生局長たるドクタ・ハイザアの物せる報告書中「癩病は千六百三十三年に此地に輸入せられたり。日本皇帝は百五十人の癩病患者を載せた一船を送つてカトリック僧侶の救護を求めたり云云」の一節があり、爾來或者は之を信じて今に至つたと云う。

フィリップスの専門家はそんな説を信じていない。ドクタ・ロドリゲスの如きは、ずっと前からフィリップスに癩は有つたと云つてゐる。その書いたのにも「千六百三十年日本より百三十人の癩人を送り、よつてフィリップスに於ける癩流行の端緒となり」と云う説の異なることはほぼ確なり。ゲレルロ氏の如きは古昔印度人の移住者より癩を移されたるマレイの人々の此地に來り此疾を弘めたりと信ず云々」と出てゐる。

然し日本からフィリップスへ癩者を送つたことは恐らくは本當の事らしい。西村真次氏が大正四年の史学雜誌にこの問題の考証を発表してゐる。慶長十九年（一六一四年）と、寛永七年（一六三〇年）とに日本から吉利支丹と乞食とを呂宋に送つた。その中には或は癩人も居たかも知れない。

「此の時の追放は皆呂宋國に遣わさるるなり。船は唐船一艘に載せて人数百余人なり。今浦上島町の渡り、戸田より船に乗るとあり。今の大波戸その時は波戸場にあらす海なり」（「長崎縁起略記」慶長十九年の記事）

又「長崎志」、「長崎古今集覽」、「異国往以略譜」に拠ると寛永七年に大阪から邪宗門の乞食七十人を長崎に送り来り、そこから呂宋へ流したということである。

別にそのうちに頼人が雑っていたと云う記事は無いが、今頼病患者の収容所になっているサン・ラザロの寺院の建設には日本人の大工が工事を助け、ここに日本人の頼人を容れたという伝説が今に伝わっている。

それで頼が日本から渡ったという説を確実に破る為めには、寺院、図書館中の古文書、古刊本から、日本人渡来以前の頼者の記事を捜し出す必要がある。

サン・トオマスのお寺では、そんな古いのでは無いが、日本の奉教人を画いた大きな油絵の額が廊下の壁に懸っていた。手を縛り首を締められ、迫害にあっているところである。日本の宣教に従うようにサン・トオマスのコレジオで修業した平戸生れの日本人のバドレ・フライ・トオマス・ナイキ（内記）が千六百三十四年の八月四日に長崎で捕えられ、その年の十一月十一日に殉教したと云うのらしかった。

国際連盟保健部の Docteur Burnet はベルグソン門で、亦二三の創作が有るが、その夫人も亦作家である。夫人はこのたびはフィリップン旅行記を書くのだと云って材料を集めていた。それで僕がしばしば旧市街の寺院に行くのに大に好奇心を抱いていた。のち「マゼランの十字架」という題で其フィリップン旅行記が出版せられ、僕も一本を買ったが、何とかいうかえ名

で古文書あさりをする日本人の学者だということになって一頁の端役に使われているのを知った。

フィリップンの紀行は少し詳しく書こうと思つて、その歴史などを少し調べたこともあったが、久しく打捨ててあつて、今急に筆を継ぐわけには行かない。先ずこの位にして置く。

（昭和五年）

比島土産話

石坂 洋次郎

外地に在つて、日本を思うと、国家の組織と
いい民族の性格といい、日本及日本人の優秀な
ことがよく分り、そういう国に生れた有難さが
沁々と胸に溢れる。殊に私の居つたフィリップ
ンは、過去四世紀にわたつてスペインやアメリ
カの支配を受けて来た国なので、住民も典型的
な弱小民族の性格を具えて居り、皮膚の色や顔
立がわれわれによく似て居る。彼等のそうした
状態を観るにつけても、自分が日本人である欲
びが歌のように胸の底から湧き上つて来た。

フィリップン民族の中堅分子はマレー族であ
る。すなわちアジア民族である。しかしなが
ら、彼等は独自の民族文化を形成する間もない
うちに、スペインに攻略されて三百年間もその
苛酷な統治を受け、ひき続きアメリカの支配に
服して来ているので、好むと好まざるとに関ら
ず、生活の仕方が西洋風になっているのは止む
を得ないところである。と同時に、彼等の血の
中に流れているアジア民族の特性が全然失われ
ている訳でもない。つまりどつちつかずなので